

桐方 柏江

パシャ

朝の光に反射するレンズを私の目は捉えた。はあ。大きく肩を落とすとサングラスが白く曇る。私は帽子を深くかぶりなおして足早に歩き始めた。

最近こんなことが増えてきている気がする。ネット上で名前と顔が開始したのは比較的最近のことなのに。芸能界というのは多くの苦労があるのだな、なんて他人事のように考える。

そもそも、シャッター音を隠そうとしないことに驚きを隠せない。一応犯罪だよ、これ。

ちゃんと対策を練らないといけないな。こんな犯罪者みたいな格好でも、私だとばれてしまうようだし。

こんな格好をしているせいで私は道行く人の視線を集めていた。

とりあえずマネージャーにでも相談してみようか。忙しそうだからあまり迷惑はかけたくなかったが、こんないざこざにはきつと慣れているだろう。

困ったことがあつたら言ってくれと笑っていたことを思い出しながら私は職場への道を急いだ。

「おはようございます」

大げさな武装を解き、私は声をかけながらドアを開ける。が、歩き回る足音たちによってかき消されてしまった。その中でも一番大きな音を立てる足に近づく。

「おはようございます。少しお話ししたいことがあるのですが」

「あら、今日も早いよね。予定が変わってもう一つ仕事が入ったからちようどよかったわ。雑誌の撮影なんだけど、大丈夫よね？」

手帳をめくりながら矢継ぎ早にまくしたてるマネー

ジャーに、私は今日も言葉を呑みかける。

「ああ、はい、大丈夫です。あの、少しお話を……」

「ああよかった。それならほら、早めに担当の方に声をかけときなさい。ちゃんとご挨拶なさいね」

背中をぐいぐい押され、彼女の声に従わざるを得なくなる。今日二度目のため息を吐き、担当者の方を探し始めた私の背に声がかかる。

「話なら仕事のあとに聞いわ。今は目の前の仕事に集中してちょうだい」

思わず振り返ると、微笑を浮かべた彼女と目が合った。うなずく彼女に、私も笑みがこぼれる。

「今日もお仕事、頑張りなさいね」

「はい！」

彼女の声に後押しされて、私は大きく足を踏み出した。

「そんなの無視ですよ、無視」

最初は作業を止めて話を聞いてくれていたのに、彼女の手は途中から近くの資料に伸びだしていた。

「え、でも、困ったことがあつたら言え……」

「芸能界ではね、そんなこと日常茶飯事なのよ。有名税って言葉知ってるでしょ？ そんなことで相談されても困るんですよ。あ、その写真の中にまずいものが映ったときはちゃんと知らせてくださいね」

目を白黒させている私に彼女は曇りかけた。

「でも、犯罪ですよね」

なんとか食い下がる私に、マネージャーは手を止めてこちらを向いた。

「そんなこと気にしている暇はないのよ。今はあなたを売り出すので手一杯。これからも芸能界でやっていきたいなら、その神経質さは捨てなさい。盗撮なんて名前が

売れてきた証明じゃない」

固まってしまった私を置いて、マネージャーは慌ただしくどこかへ行ってしまった。夕暮れ時のさびしさが着々と忍び寄ってくる。

「有名税、ね」

その言葉を聞いたことはあったが、実際、使われるのを聞くのは初めてだった。

有名である前に私は一人の人間であるはずなのに。有名である代償に私は自分の人権を捨てなければならぬのだろうか。

吐き捨てるように言われたそれは、ずいぶん都合の良い言葉に思えた。

ブーブー

突然の音に肩がはねる。ああ、このあと高校の同窓会があるから、忘れないようにアラームをかけていたっけ。久しぶりの友人に会える胸の高鳴りは、針に刺された風船のようにしぼんでしまっていた。その風船からは空気の代わりに、どろどろとした真つ黒いものがあふれ出す。「行きたくないなあ」

そうは言っても、突然のキャンセルは迷惑になってしまっただろう。動こうとしない足に鞭打って、私は職場のドアを押し開いた。

「久しぶり」

この同窓会を企画した委員長の彼を見つけ、声をかける。当時から恰好いいと評判だった彼は、相変わらず道行く女性の注目を集めていた。

「やあ、久しぶり。まだ集合時間前だから、お店に入れ

ないんだ。その小道にみんないるから時間まで待つてくれるかい？」

「分かった。あ、そうなの？ みんな随分早いね」

「そりゃ、長いこと会ってなかったからね。そういえば、君、芸能界に入ったの？」

「どうやら、私は自分が思っている以上に有名になっているようだ。封じようと思っていた言葉が奥の方で動き出そうとする。」

「まだ始めたばかりで、雑誌のモデルくらいしかやっていないけどね」

「それでもすごいよ。芸能界は色々大変そうだけど頑張ってるね」

「ありがとう」

会話がなくなり、二人の間をムズムズするような空気が流れる。どうしよう。気まずいな。

「ねえ」

「あ、いたいた。ひさしぶりー」

彼が口を開いた瞬間、当時派手だった女子グループが人ごみの中から流れ込んできた。ちようどいい。この間に小道に逃げ込んでしまおう。

逃げ方を考えていた私の耳に彼の声は届いていなかった。小道に入ってみると、手前の電柱のそばによく知る二人の姿が見えた。

「久しぶり」

気づいた友人が話を止めて顔をほころばせる。

「久しぶり、元気にしてた？」

「もう、全然連絡よこさないんだから」

懐かしい空気が小道いっぱいに広がる。なぜだかみんなの服と制服がぼんやりと被って見えた。

「元気だったよ、ありがとう。ごめんね、仕事が忙しくて」

「そうだよ、ねえ、芸能界に入ったんだって？ すごいね」

「私も見たよ。思わず周りの人に『この人、私の友達なんです』って自慢しちゃった」

「ちよっと、恥ずかしいからやめてよ」

しばらく会っていなくても、二人は全く変わっていないくって、いつの間にか私の肩の力は抜けてしまっていた。仕事の話、大学の話、今まで話していなかった分、三人できやいきやい盛り上がった。

その合間、置いてきてしまった彼の方に視線を投げると、女子グループのリーダーに詰め寄せられ、後ずさりしているのが見えた。戻った方がいいだろうか。いや、やめておこう。彼女らの怒りを買うのはごめん。

「どうかしたの？」

「いや、なんでもない。何の話をしてたっけ？」

「ちよっと、ちゃんと聞いててよ」

「そういうところあるよね」

「ごめんって」

おどけて二人を揜んでみせると、彼女たちはしようがないと笑ってくれた。

その後も仲良く話していると、彼女たちは小道に入ってきた。彼はうまくあしらえたようだ。

こちらと目が合った彼女たちははずかしくこちらに歩み寄ってきた。

「ねえ！ 最近芸能界に入ったでしょ、あんた」

「え、うん、まあね」

高校のクラスにありがちな勢力争いあまり入りたくなかった私たちは、どちらのグループともつるむことは

なかった。しかし、クラスにいる以上彼らの声は聞こえてくるわけで。私は彼女たちにあまりいい印象を持っていなかった。

それは私の友人も同じだろう。彼女たちの顔も私と同じように引きつっていた。

「あんた、昔から顔はよかったもんねー。でも、それだけでやっていけないの？ あ、私があんたの写真撮って売りさばいてあげようか。人気も出るし、お互いウィンウィンじゃない？」

取り巻きの女たちとともにクスクス笑っている。

「やめなよ、仕事頑張ってる人に失礼でしょ」

「なに？ あんたの写真も売ってほしいわけ？ やめときなよ、あんたの顔面で売れるわけじゃないでしょ」

友人の一人が前に出てくれたものの、彼女の気迫に押し負ける。前から聞こえるクスクス声が大きくなる。

これは断り方を間違えると大変だ。彼女たちはネットに、私の評価を下げるようなコメントをいくらでも書き込めるのだから。それが嘘だとしても、芸能界では大ダメージだ。

「ちよっと委員長呼んできてくれる？」

これは彼の力を借りるしかない。二人にささやいて、私は何とか言葉を出そうとしてみる。

「それはだめでしょ」

突然、私の後ろから声が聞こえた。

「事務所と契約を結んでいながら、他と取引するのは契約違反だし、芸能界はそういうの厳しいよ」

聞きなじみのない声に、私は思わず振り向いた。目に飛び込んできたのは、いつも静かに本を読んでいた彼だった。

「なによ、あんたには関係ないでしょ。変な正義感で動

かないですよ」

「そーよ、黙ってなさいよ」

がなり立てる彼女たちに彼は冷たい視線を向ける。

「悪いね、僕は仕事柄、見逃せないんだよ」

「は？ どういうこと？」

頭にハテナを浮かべた私たちに名刺を差し出す。

「僕は警察に勤めてるんだ。昔のクラスメイトを逮捕したりしたくないんだよ」

私と彼女たちの目は、名刺と彼の顔とを行き来した。

取り巻きたちはお互いに顔を見合わせあっている。

「じよ、冗談に決まってるでしょ、さっきの。私はこんな人気の出なそうなやつに興味ないわよ」

吐き捨てたセリフは、彼女にしてみればとても弱弱しいもので、私は少し胸がすく思いがした。

「ありがとう」

彼に向きなおってお礼を言う。

「別に、仕事だからね」

にこりともせず彼は言う。

「まあ、でも、なにか困ったことがあったら言ってくれども構わないよ」

それはどこかで聞いたようなセリフで、彼は無表情だったが、私はこちらの方が温かく感じた。

「大丈夫？」

二人に呼ばれて委員長は走ってきたようだ。後ろの友人たちも不安そうな顔をしている。

「うん、もう大丈夫」

今日の同窓会はどうやら楽しいものになりそうだ。